終戦前後（及終戦）に於ける朝鮮方面の概況

1. 終戦前に於ける作戦準備の概要

昭和二十年五月下旬、沖縄の戦況が愈々重大化するや、敵の九州方面に進攻する算が屯に増大するに至つた。而て、此の場合、敵は、北九州攻略の足掛りとして、必ず済州島の攻略に努むべく、且つ、本土と満洲との分断を企図する場合に於ては、必然的に南鮮にも進攻すべし と 判断せられたが、又、一方、「ソ」連の参戦は時期の問題とされ、その際に於ては、北鮮に対する「ソ」連の進攻は必至と判断せられるに至り、かくて、朝鮮の防衛は甚だ重大視せられることとなつた。

大本営は、此の情勢に対処する為、五月三十日の大陸命により、第十七方面軍（司令官上月良夫中将）をして、中南部朝鮮の防衛に専念せしめ、北鮮の対「ソ」防衛作戦準備は関東軍の任務とすることに定め、

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

隊に於て、咸鏡に配置せられて居た第十七方面軍麾下諸部隊（第七十五師団・第百一連隊及最新・永興湾要塞部隊等）を第十七方面軍の戦闘序列より脱し、之を関東軍の戦闘序列に入れた。関東軍総司令官は、之等の部隊を第三軍に編入し、概ね羅津を含む東面の線以北の咸鏡北道の地区を之に担任せしめた。

又、大本営は、六月十七日、中支漢口の第三十四軍司令部（司令官横溝酒盛一中将）の北鮮転用を発令すると共に、翌十八日、第三十四軍の戦闘序列（第五十九師団・第百三十七師団・独立混成第百三十三旅団其他）を合し、且つ、之をも関東軍の戦闘序列に入らしめ、関東軍司令官は、第三十四軍に対し、咸鏡北道方面より進攻する敵に対し、咸興附近の要地に於て之を撃砕し、已むを得ざるも敵の京城及平壌方面に向う前進を阻止すべき任務を附与したが、其后八月に入つてから、第三十四軍（新に羅南師管区部隊を指揮下に入らしめられる）は、第十七方面軍司令官の指揮下に入り、咸鏡南道と前述第三軍の作戦地域に連接する咸鏡北道をその作戦防衛担任地域とする如くせられた。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

南鮮に於ける作戦準備は、専ら、米軍の上陸を対象として進められ、六月上旬頃の態勢は、先づ済州島を優先重視し、此処に第五十八軍司令部（軍司令官　永津佐比重中将）及　隷下兵団たる第九十六師団（師団長　飯沼　守中将）第百十一師団（師団長　岩崎民雄中将）及　独立混成第百八旅団　其他　を　配し、朝鮮本土には、第百二十師団（大邱其他　師団長　神川真一中将）・第百六十師団（群山附近　師団長　山脇正男中将）　其他　を　置いた。

以上の他、五月二十五日編成を下令せられた第三次兵備の第三百二十師団（師団長　八隅錦三郎中将）　及　独立混成第百二十七旅団　を始め、独立混成連隊二ケ、其他多数の戦闘・兵站諸部隊が、編成最中であつたが、此の頃の充員の状況は、鮮内に残存せる在郷軍人の殆んど大部と多数の鮮系壮丁によつて編成せられつつあつた状況で、全般の素質は甚だ低下して居り、更に、装備に亜つては、火砲は皆無に近く、重火器の如きも、定数の二〇～二五％を充足し得る程度に過ぎ

0075

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

一方敵側作戦準備は、支那派遣軍から新編される第五航空軍（軍司令官　下山琢磨中将）主力が逐次到着中で、下山軍司令官は、五月下旬、南京より直域に到着し、在鮮第五十三航空師団を併せ指揮し、朝鮮海峡方面を重点とする作戦準備に着手した許りであつた。

六月上旬、第十七方面軍司令官は、時の形勢に鑑み、済州島の防備を速急に強化すると共に、南鮮西南正面に戦力を集中する如く作戦計画を修正し、即ち之により、新に第二十一師団を済州島に増強する他、支那及金州各附近に夫々第百二十師団　と　新設第三百二十師団を編成し、尚、新設混成第百二十七旅団をして釜山方面の防衛を担任せしめることとし、此の処置は、七月より八月に亘つて大部分進捗した。

大本営は、更に、済州島に一ケ師団を増強する如く要望した。方面軍は、七月下旬、如上大本営の要望に基き、且つは、当時の情勢に基く自らの判断にも鑑み、八月中旬より第百二十師団を同島に輸送する如く決心を定め、その準備を進めることとした。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp